

**平成21年度 講座「丹波学」**

**(続)丹波の城  
～篠山城築城400年～**



**(財)兵庫丹波の森協会 丹波の森公苑**

# 目 次

1 講座「丹波学」の開講にあたって	1
2 篠山城と縄張り	3
3 篠山城大書院の障壁画	7
4 篠山藩主 松平氏・青山氏について	15
5 篠山城下町の空間構造	19
6 丹波の城をめぐる篠山城跡と採石場	24
7 講師プロフィール	30
8 編集後記	31

# 1 講座「丹波学」の開講にあたって

## 1 丹波の森構想（丹波の森づくり）

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置する森の国です。篠山市と丹波市からなり、阪神大都市圏から50～70kmの近郊にありながら、森林面積が約75%を占め、豊かな自然や田園景観が残され、心のふるさとというべき大きな価値を持つ地域です。また、播磨、京都、大阪、日本海側からの街道が交差し、加古川、武庫川、そして、由良川の源流をなすことから様々な文化が入り交じり、まさに文化の十字路として独特な文化を育んできました。

近年の社会情勢の変化はこの豊かな丹波の姿を急速に変えてきました。同時にそこに住む人々の心にも大きな変化を与えてきました。

こうした急激な社会変化に直面した現在こそ、新しい時代に向けて積極的に丹波の環境創造を進める丹波人の育成が必要になってきています。

このような状況の中で、かけがえのない美しい自然空間や、人々の営み、生活空間、生活文化、地域内外の人々の交流などを含め、「丹波の森づくり」を丹波をあげて取り組んでいます。この「丹波の森づくり」のベースになっているのが、人と自然と文化の調和した地域づくりを目指す「丹波の森宣言」です。

## 2 講座「丹波学」の開設

丹波の森公苑は、丹波の森づくりの拠点であるとともに、生活創造活動に必要な基本的な考えを提供し、共に考え実践する場を創造するところでもあります。

講座「丹波学」は「丹波の森宣言」の中で提起された「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。」という提言を主題として平成8年度から開設しています。

本講座は、単なる郷土史等の講座ではなく、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、

地理、言語などを総合的に研究する地域づくりを目指す地域学です。

## 3 平成21年度のテーマ

今回のテーマは、「(続) 丹波の城 ～篠山城築城400年～」。

平成15年度の「城から見た丹波の森」平成20年度の「もう一度学びたい丹波の城」に引き続き「城」をテーマとして、今回は篠山城築城400年を記念して、丹波の城、とりわけ篠山城大書院にスポットをあて、篠山城の存在意義、美術、城下町等のいろいろな角度からより深く探求しています。

丹波では、伝統的な住宅建築が減少し、村落景観が自然との調和を失い、また近隣との関係が疎遠なものになりつつある現在、我々の文化景観や生活文化に密接に関わる丹波の城を再度見直すことは非常に有意義なことと思われます。

### 丹波の森宣言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。

2 丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。

3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。

4 丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

#### 4 講座内容

■テーマ (続) 丹波の城 ~篠山城築城400年~

■期間 平成21年8月8日(土) ~ 10月3日(土)

■場所 丹波の森公苑 多目的ルーム

篠山市民センター 催事場 篠山城跡 他

#### ■日程

開催日	時間	学習テーマ・講師	会場
8月8日(土)	13:00	受付	多目的ホール
	13:30	開講式・オリエンテーション	
8月22日(土)	14:00	<b>篠山城と繩張り</b>	多目的ホール
	16:00	岡野多目的研修センター館長 大路 靖氏	
9月5日(土)	14:00	<b>篠山城大書院の障壁画</b>	多目的ホール
	16:00	甲南女子大学 教授 木村 重圭氏	
9月12日(土)	14:00	<b>篠山藩主 松平氏・青山氏について</b>	多目的ホール
	16:00	篠山市文化財保護審議会 委員 今井 進氏	
10月3日(土)	14:00	<b>篠山城下町の空間構造</b>	篠山市民センター 催事場
	16:00	大阪市立大学 教授 仁木 宏氏	
	14:00	<b>丹波の城をめぐる 篠山城跡と採石場</b>	篠山城跡 他
	16:00	郷土史研究家 池田 正男氏	

## 2 篠山城と縄張り

岡野多目的研修センター館長 大 路 靖



### ◇はじめに◇

2009年は、篠山の地に城が築かれてからちょうど400年になる。篠山市では築城400年を記念して、いろいろなイベントがおこなわれてきた。この機会に、なぜ城が築かれたのかを検証してみたいと思ったのである。

徳川氏によって築かれた城、そこにはどんなもくろみがあったのかを確かめてみた。



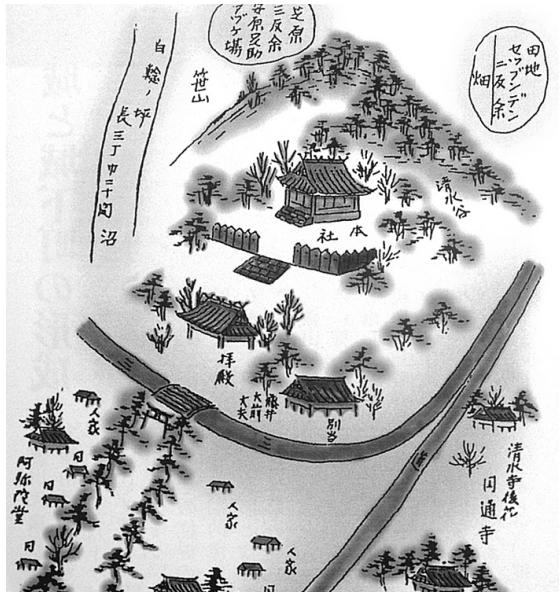
### 1. なぜ篠山に？

篠山の地は、大阪をはさんで西国をにらむ交通の要衝であったことが最大の理由であろう。徳川家康は、関が原の戦いに勝つことは出来たが、豊臣秀頼を大坂城主として残さざるを得なかった事情がある。また、西日本にひしめく諸大名と秀頼との関係が絶たれたわけでもなかったのである。

家康は大坂城包囲網の一拠点として篠山の地を選んだ。周囲を山に囲まれた篠山盆地は、要塞堅固の地ととらえ、豊臣方の退路を絶つために大阪攻略の前線基地としたのである。

### 2. どこにつくるか？

篠山盆地の中央を東から西に流れる篠山川をそばにして3つの小山が築城の候補地になっ



春日神社旧社絵図

た。それは王地山・笹山・飛の山であった。差し出された絵図面をもとに築城の決定を下したのは、徳川家康である。

「東に間近く王地山あるは武運長久、幸せの前兆なり。急ぎ城郭を築くべし・・」と記録されている。

「夫笹山之城地者日置庄之内黒岡村の氏神春日大明神の宮地也。笹山と云ひて山一つにして外に続かず、七尾七谷ありて四方へ尾筋たれ、上平らかにして川竹真竹生いしげり、東の尾先に社壇あり…」（篠山御城御取立より）

こんもりとした独立丘「笹山」が築城拠点となつたのであった。

### 3. 天下普請の城

築城は天下普請とした。家康は、西国の大名たちの財力をそぐことを計算に入れ、外様大名20名に助役を課したのであった。普請総奉行に池田輝政（姫路城主）、繩張り奉行に藤堂高虎（津城主）を用いたのである。

助役の主な大名には、広島の福島正則（49.

8万石）、岡山の池田忠継（31.5万石）、山口の毛利秀就（36.9万石）、高知の山内康豊（20.2万石）などがあげられる。篠山近辺では水上柏原の織田信包（3.6万石）、福知山の有馬豊氏（8万石）初代城主となる松平康重（5万石）などが指名された。助役大名の総石高は354万石余となった。

工事の人夫は石工100石につき2人と定められていたらしい。それにより計算すると70,800人の人間が篠山城築城にかかわったことになる。高知藩の記録によると、「…せばき谷に右の御普請衆入こみ申候故、野も山も人にて御座候…」と記されている。

工事は慶長14年（1609）6月から始まって、土木工事は9月に一応終了した。「…本城一枚岩にて、夜な夜なは薪を積みかけ焼きて、昼はかなつき、つるのはしにて地形引きさけ申候…」まさに突貫工事であった。徳川家康の実子といわれる松平康重は12月に篠山城に入城している。

工事の進展がはかばかしくないと理由で、家康から注文が出ていた。

「…隅櫓や多聞櫓はつくる必要はない。櫻塀で十分である。天守も必要ない。（中略）大がかりな建物は、ろう城戦ともなれば簡単にこわすこともできず、邪魔になるだけ。ただし、弓、鉄砲の隠し狭間は、しっかりと造つておくように、狭間が人目に付くようであれば、敵に狙い撃ちされるもとになる…」

家康は、この城での実戦を予想していたようである。

### 4. なぜ、そんなに急いだのか？

家康には、心穏やかならずの情報が届いていた。

慶長8年（1603）千姫を豊臣秀頼に輿入れさせたとき、諸大名の居並ぶなかで広島城主福島正則が、秀頼への忠誠を呼びかけた行為があった。また、慶長11年（1606）「此二三箇年中、九州・中国・四国衆、何れも城普請専也、乱世遠からずとの分別かと…」西国大名たちの動静が気になっていた。

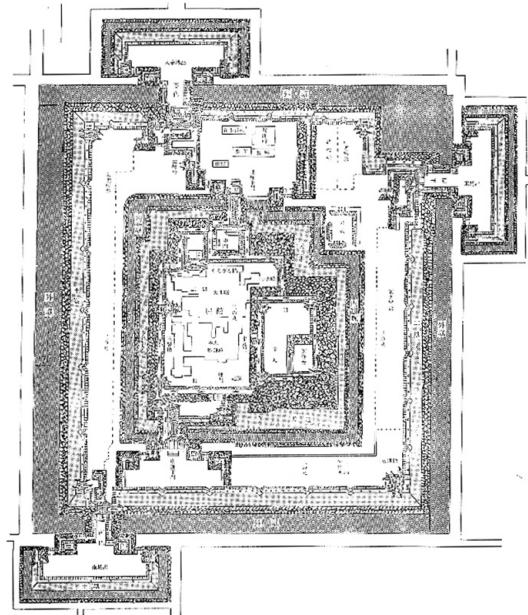
「西国大名衆が兵糧米を大阪へ運送…」にいたって、ついに慶長14年（1609）500石以上の大船を没収してしまうのであった。

## 5. 徳川家康のもくろみ

家康は戦略に長けた武将であった。彼の所業を年表によって拾い出してみると次のようになる。

- ・慶長5年(1600) 関ヶ原の戦いで勝利
- ・慶長8年(1603) 家康、江戸に幕府を開く
- ・慶長10年(1605) 家康、將軍職を秀忠に譲る
- ・慶長11年(1606) 家康、江戸城を増築
- ・慶長14年(1609) 家康、篠山築城を命ず（天下普請）
- ・慶長15年(1610) 家康、名古屋城築城（天下普請）
- ・慶長19年(1614) 大坂冬の陣 両軍講和
- ・元和元年(1615) 大坂夏の陣 大阪城落城
- ・元和2年(1616) 家康没（75歳だった）

家康は徳川家の安泰を最大の目標にし、そのための戦略に明け暮れたのであろう。早くから秀忠に將軍職を譲ることによって、「徳川家」の勢力を固めるとともに、幕府は元和5年（1619）豊臣方の重臣福島正則を勝手に城を修復したという理由で、武家諸法度にのつとり、お家とりつぶしにしたのだった。



## 6. 篠山城の縄張り

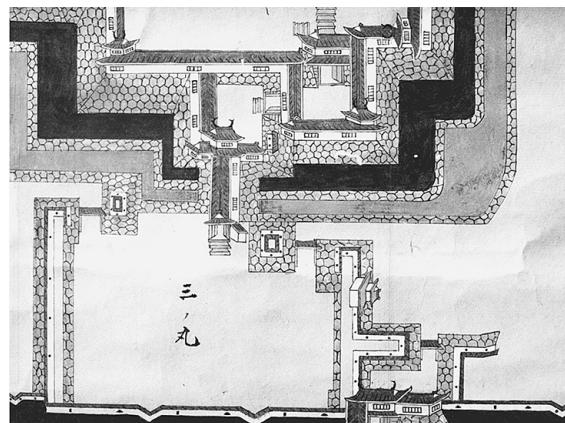
石垣しか残っていない小さな城が注目されるのは、その縄張りにあるといえよう。三方に馬出をもつ平山城は「馬出」という特別な構えをもった防備に優れた城であった。石垣の高さは15mしかないが、うまく屈折されることによって敵を狙い打つのに死角をつくらない構造になっており、城内に容易に入り込めない造りになっている。

大手門から三の丸に入るにしても何度も折れ曲がらないとたどり着くことができない。これは城内に入り込めばわずかの人数でしか移動できない仕組みになっている。こうした構造が城を守る最大の武器であった。

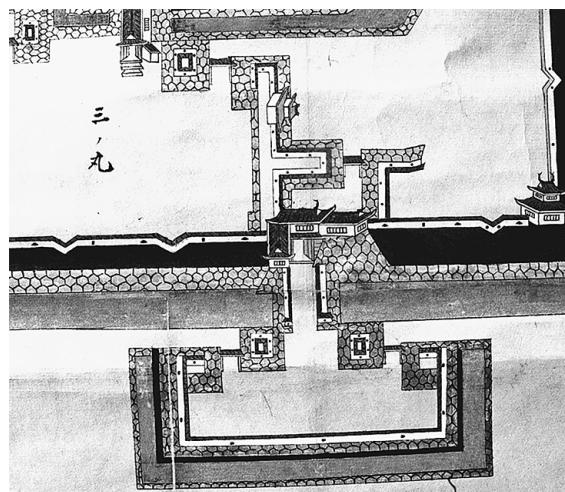
城内南側の門は埋み門という仕組みで、城内に入っても見えない存在になっている。こうした建築は、家康に「堅固に過ぎる」といわせた造りでもあった。こうした工事の遅れは「戦いともなれば、かえって邪魔になる」との理由で天主閣も建てるうことなく、材木を算木積みにされたと記録にある。

## 7. 城の守り

城の守りは城郭だけでなく、城の周りの地形をうまく利用した。濠と馬出の組み合わせや、黒岡川・篠山川の川筋の変更、城下を通る街道はカギ型やT字型に曲げられ、すぐには城に近づけないようにした。城下町の出入り口に寺院を配置し、実戦の場合の砦に利用できるようにもした。武士は役柄によって居住区を分け、城下町全体で城を守る構造をつくりあげたのである。



三の丸から二の丸に通じる構え



大手門への進入路

## 8. まとめ

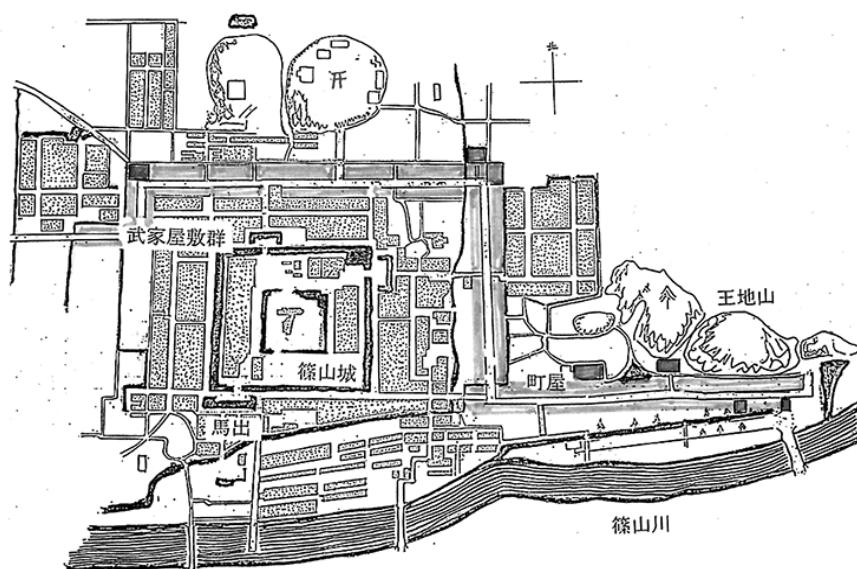
篠山という地名はこの城からはじまった。黒岡村の笛山に家康が築城を命じなかったら、「篠山」という地は存在しなかったであろう。篠山市は城ときってもきれない関係をもって発展していった。

### ◇参考文献

多紀郷土史考

二十世紀から二十一世紀へのおくりもの

(篠山城跡大書院復元工事竣工記念誌)



「篠山城之地図」より作図（篠山小学校蔵）

# 3 篠山城大書院の 障壁画

甲南女子大学 教授 木 村 重 圭



## ◇はじめに◇

篠山城の大書院が焼失したのは、昭和19年（1944）1月であった。失火と伝えられている。

姫路城に代表されるような高い石垣の上に、三重、五重の天守がそびえる城は近世城郭と呼ばれている。この近世城郭の出現は、織田信長によって築かれた安土城に始まるとしている。織田信長に続いて天下人となった豊臣秀吉の聚楽第、大坂城、伏見城等々へと継承された。さらに、徳川家康の江戸城や名古屋城と、次々に大城郭が築かれて行った。また、各地の大名達も、それぞれの居城としての城郭殿舎が競った。それは慶長期（1596～1615）の一大築城ラッシュの時代であったとも言えよう。

しかし、それらの城郭は、度々の合戦や政治情勢の中で滅び、姿を消して行った。江戸城天守のように火災で焼失したもの、明治を迎えて東北の城郭のいくつかは、戊辰戦争の渦中に巻き込まれた。天下に誇った加藤清正の熊本城は西南の役で鳥有に帰した。加えて最後に、明治政府による廃城令で、全国の城郭が取り壊されるに至った。姫路城、名古屋城、岡山城、広島城等々一部の城郭は保存されたものの、その中から名古屋城や岡山城、広島城、福山城、和歌山城などのように、太平洋戦争でアメリカ軍のB29の空襲で、空しく潰え去った城も多い。

ご存知のように、城は外敵からの攻撃や侵入を防ぐための砦である。そのための天守であり、櫓、門、堀、堀、石垣が幾重にも取り囲んで厳重な守りを展開している。防御施設である天守や櫓の内外部には、革美な装飾は施されていないのが一般的である。ただ安土城は天守の内部にも狩野永徳一門による金碧障壁画で華麗に飾り立てられていた。恐らく聚楽第や大坂城、桃山城などの天守の内部もそうであったろうと推測している。

その防御施設である城郭の中で、城主一族や家臣団が住む居住部分、政事を行う御殿の内部は豪華絢爛たる装飾で囲繞されている。いわゆる殿舎（御殿）の部分である。天守や櫓は防御のための施設であって強の面とすれば、御殿は柔の面を備えていたことになろう。

## 城郭の御殿

さて、城郭の殿舎（御殿）で、ほぼ当初の姿で現存するのは、二条城二の丸御殿のみである。名古屋城本丸御殿も現存していたが、昭和20年（1945）に戦火により焼失してしまった。幸い城壁画のうち壁貼付を除く襖絵、天井画は疎開されていて難を逃れ、今日に伝えられている。他にも高知城本丸御殿や掛川城にも御殿は残っているが、規模も小さく、内部の襖絵等も失われてしまった。

そうした中で、篠山城本丸御殿（現在は二の丸と呼ばれているので、混乱をさけるため、ここでは現在の呼称に従い、二の丸御殿と表記する）は、大書院のみであるが、幾多の星霜を潜り抜けて昭和迄伝えられていた。しかし、その篠山城大書院も昭和19年（1944）に失火で焼失したのである。現存しておれば、城郭の御殿の大書院として最古のものであった。というのは、名古屋城本丸御殿が慶長19年（1614）、二条城二の丸御殿が寛永3年（1626）の造営である。それに対し、篠山城の築城は慶長14年（1609）と最も古いということになる。

しかし、この篠山城大書院も内部の障壁画は早くに撤去されてしまっていた。

## 御殿の障壁画

先にも触れたように、城郭の中で、天守や櫓には、その内部に障壁画が描かれる例は極めて希である。一方、御殿の内部は、床の間、違い棚、襖、壁（壁貼付、土壁の表面に枠貼りした襖状のパネルを嵌め込んだもの）、天井等に装飾が施されている。絵のないのは床と畳の上といってもいいであろう。

明治の廃城令により、一部を除いて全国の

城郭、陣屋の建物が取り壊された。その時、御殿も先のとおり、ほぼ全部取り壊されてしまったのである。名古屋城本丸御殿、二条城二の丸御殿を残して。篠山城も例外ではなく、二の丸御殿は、その折に取り壊されたのである。ただ大書院のみが残された。

それらの御殿の内部は、名古屋城本丸御殿、二条城二の丸御殿に見られるように、絢爛豪華な障壁画で埋め尽くされていた筈である。しかし、取り壊された御殿の障壁画は、どこへ行ってしまったのであろうか。全国的に見て一部保存されているものも見られるが、ほとんど（100%に近く）が消滅してしまったようである。篠山城大書院も例外ではない。折角建物が保存されたにもかかわらず、内部を飾っていたであろう障壁画類は、全く姿を消してしまった。城と共に障壁画も破却したものとしか考えられない。もし、誰かが引き取っていたとしたら、今日もどこかに現存しているはずであるが、そうしたことは全く聞かない。全国的にである。

先年、明石城の御殿の襖絵であったと伝えられるものが出て、アメリカ、ニューヨークのザザビーズのオークションにかかったことがあった。花鳥図襖六面分（現在2枚折の屏風3点に改装されている）であった。しかし、明石城の襖絵という伝称であるが、いろいろと調べたが、確証は得られなかった。今後も、こうした作品が出てくることを期待したい。

## 篠山城大書院の襖絵

篠山城も明治の初めに、城内の建物はことごとく破却されたが、大書院とその玄関部分のみ残された。大書院の奥（南側）に続いた中奥、奥御殿、台所などの建物は、すべて取

り壊されてしまった。当然のこと、それらの部屋の多くも、障壁画で飾られていたことであろう。今日、大書院も含め内部の障壁についての記録は全く残されていない。

幸い篠山城の御殿古図が現在6点確認されており、その内の3点に大書院の各部屋の名前が記されている。表Iのとおりであるが、便宜上、上段の間より時計と逆回りで記すと、

一、上段之間

二、次之間・千鳥之間

三、蒲（葡）萄の間・上源氏之間

四、源氏之間・下源氏之間

五、手鞠之間

六、虎之間

七、孔雀之間

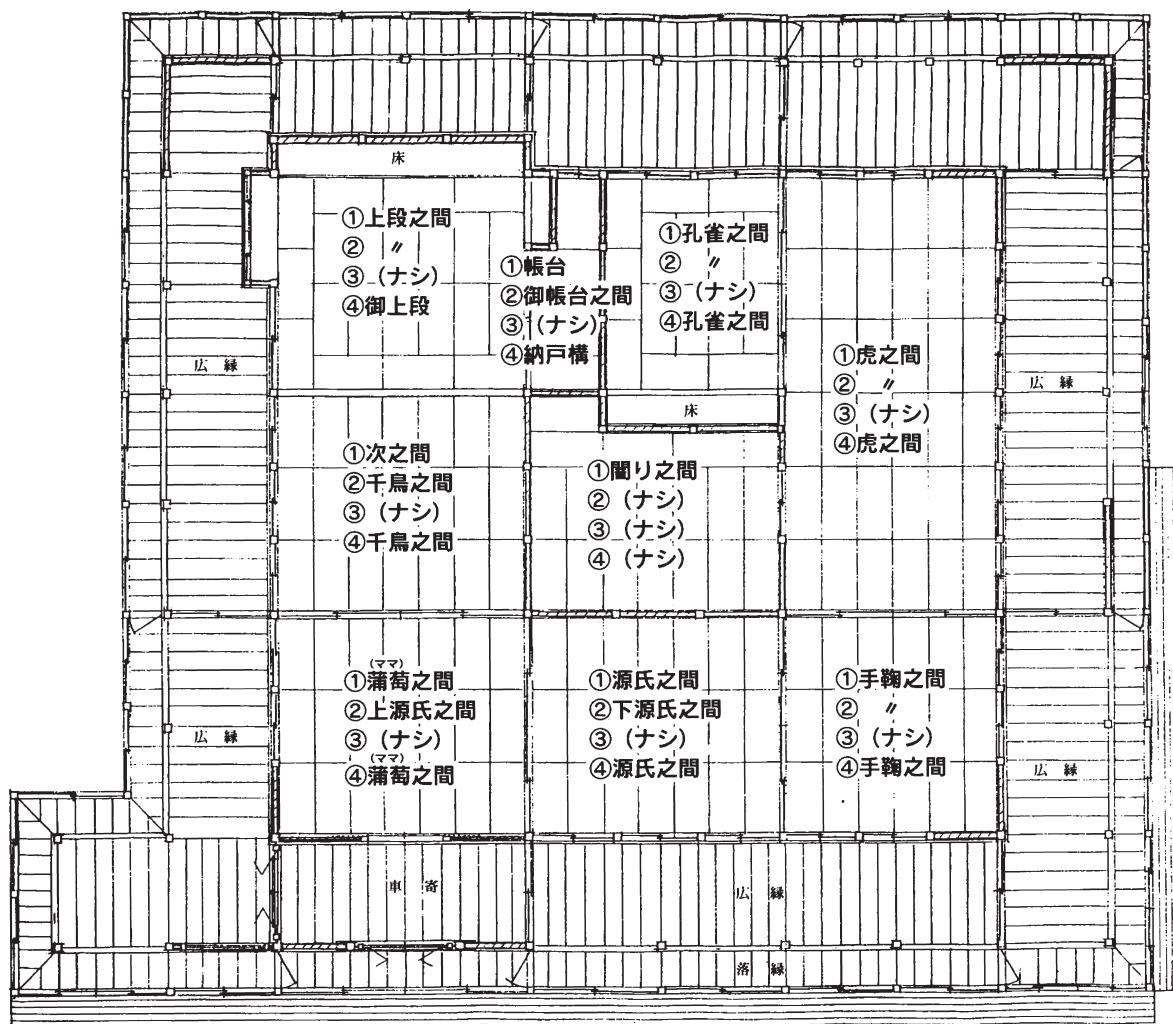
八、帳台・御帳台之間・納戸間

九、闇（くらが）り之間

となっている。以下、順次みていくこととする。

### 一、上段之間

大書院の中で一番の上座で、他の部屋より一段高くなっている。城主や高位の客人が座る場で、正面には三間半の床と、右（向かって、以下同じ）に違い棚、左に出書院が配されている。さらに違い棚の手前には帳台構



表I 二の丸御殿間取古図にみる部屋名

(武者隠し) が設けられ、二の丸御殿上段の間の格式を示している。しかし、どの図面にも上段の間を飾っていた障壁画の画題は、書き留められていない。

ところで、現存する二条城二の丸御殿の上段の間、焼失したが写真が残る名古屋城本丸御殿上段の間は、正面の床から回りは、すべて松の図が描かれている。

江戸城も御殿はすべて失われたが、幸いにして天保10年（1839）の西の丸御殿、弘化2年（1845）の本丸御殿の造営の折りの小下絵（こじたえ）が東京国立博物館に保管されている。全体は264巻にも及び、その多くは当時の木挽町（こびきちょう）狩野家当主晴川院養信（せいせんいんおさのぶ・1796—1846）の手になるものである。これにより、江戸城の本丸御殿、西の丸御殿の内部を飾っていた障壁画の全貌を知ることができる。

そして、本丸御殿も西の丸御殿も、上段の間は共に松の図で囲繞されていたことが知られる。

以上の例から推測して、篠山城大書院の上段の間の床貼付、違い棚、帳台構の部分には、松の図が描かれていたと考えていいであろう。

## 二、次之間

上段の間の前（北側）は、古図には「次之間」、「千鳥之間」とある。他の御殿では「中段の間」、「一之間」等と呼ばれていることもあるが、いづれも同じ意味で、上段の間に對しての呼称である。

篠山城大書院では「次之間」と呼ばれていたのである。そしてまた、「千鳥之間」とも呼ばれていたことから考えて、この部屋の襖絵は千鳥の図が描かれていたものと思われる。

しかし、千鳥の図というのは、寡闊にして他に知るところがない。おそらくは浜松図で、海辺に松の木が続き、千鳥が飛んでいるような図ではないだろうか。

弘化2年（1845）の造営で、時代はかなり隔たるが、江戸城本丸御殿の上段の間（松に鶴図）に続く松の廊下は、正しく浜松図で、松の木々の間や浜の上を、多くの千鳥が飛んでいる図である。篠山城の大書院の次の間の千鳥図も、この様な絵であったのだろうか。

篠山城大書院は、上段の間と次の間が続いており、間に襖などの間仕切はない。すると、上段の間と次の間は、一続きの部屋ということになり、次の間も上段の間と同じ松の図であったのではないだろうか。次の間は西側に三面の板壁（絵付など）と北側に四面の襖があり、その図柄は、上段の大床の松の図と連続する内容で海辺の松に千鳥を配するものではなかったか。この様な図柄は一般には浜松図と呼ばれるが、千鳥がたくさん描かれていることから千鳥の間と呼ばれるようになったと推測してもいいのではないだろうか。

右のように解釈すれば、千鳥の間という珍しい室名の由来が理解できるのである。

## 三、上源氏之間

古図には「蒲萄之間」、あるいは「上源氏之間」とある。「蒲萄」は「葡萄」。ブドウの誤記であるから、この部屋にはブドウの図が描かれていたのであろう。もう一つ「上源氏之間」とも書かれている。この部屋の西側の部屋は「源氏之間」「下源氏之間」とある。上・下は部屋の位置関係を示すもので、ともに源氏物語をテーマにした画題が、二室にわたって描かれていたと見ていいであろう。と

ころが、上源氏の間は「葡萄の間」ともある。この両者の関係は、いかなるものであろうか。

篠山城の御殿絵図は6点が知られており、その内4点に大書院が描かれているものの、それらの制作年代が不明であるため、「葡萄之間」と「上源氏之間」の前後関係は判明しない。

考えられる一つの理由は当初は「葡萄図」か「源氏物語図」が描かれていたが、破損がひどくなったりとかで書きなおされた。その折に元の画題とは違った図が描かれたのではないかということである。一部屋だけが書き改められるというのは、いささか疑問はあるが、それ以外の理由は思い当たらない。

では「葡萄図」と「源氏物語図」のどちらが先であったかは、古図の制作年代が不明であるので、これも判然としないのが現状といえる。

#### 四、下源氏之間

ここは当初より「源氏物語図」が描かれていたと考えられる。「下源氏之間」とあるのは、隣室の「上源氏之間」から見て下手に位置する部屋という意味である。同じ源氏物語図を描いていても、「源氏物語」という長編物語のどの部分を取り上げて描いていたのかは定かではない。

#### 五、手鞠の間

この部屋も古図2点に共通しての名称で「手鞠図」が描かれていたのであろう。しかし、「手鞠図」というのは、あまり聞かない図柄なので、その図様を想定するのはむつかしい。「蹴鞠図」はよく描かれているが、「手鞠図」とはどのような図様であったか興味が

引かれる。鞠だけを幾つも襖に描いた文様状の絵ではなく、おそらくは手鞠遊びをしている様な図柄であったろうと推測している。

#### 六、虎之間

ここは玄関から入って、最初に行き着く部屋である。名古屋城本丸御殿や二条城二の丸御殿では、遠侍（とおさむらい）と呼ばれている部屋に当り、いずれも「竹虎図」が描かれている。すなわち、竹林に虎の群れ（雌雄や子）が描かれていたことは間違いないであろう。

襖と壁貼付の十四面と、廊下に面する腰高障子の下半分の所（14面）にも絵は連続していたと考えられる。大書院の中では最大の画面ということになろう。

尚、今までに見て来た各部屋も、廊下側は多く腰高障子になっているが、その腰の部分も部屋の名称と同じ図柄が連続していたと考えて大過ないであろう。

#### 七、孔雀之間

虎の間を左へ折れた大書院南側、中央に位置する部屋である。奥正面の部屋で北側に二間半の床が設けられており、その床を中心に右側（床に向って以下同じ）、壁貼付三面と、左側の襖四面に孔雀を題材にした絵が描かれていたであろう。図柄は何本かの松の木に、これまた何羽から孔雀を配したものと思われる。

#### 八、帳台（納戸構、御帳台之間）

いろいろの名で呼ばれているが、ここは上段の間の帳台構の内側、武者だまりとも称される部屋で、陰の部屋になり、襖絵などは描

かれていなかったと考えられる。室名の一つに「納戸構」とあることから、平素は納戸、すなわち物置として使用されていたらしい。

### 九、闇（くらが）り之間

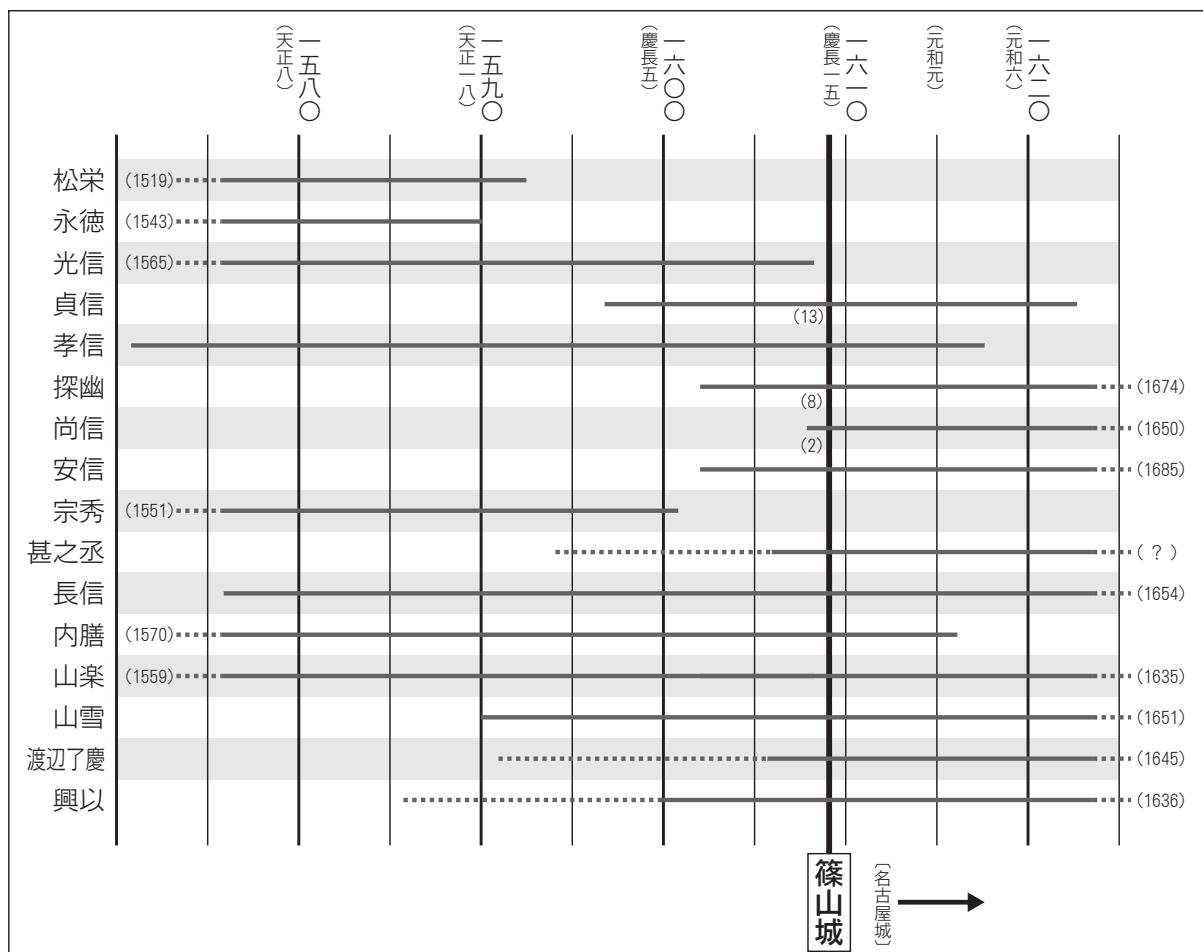
大書院の真中に当たる部屋で、北、東、南の三方は板壁で、隣室との間が閉じられている。唯一の出入り口は、西側中央の襖二面で、虎の間から入ることができる。そのため、この襖二面を閉めてしまうと、中は正しく真暗となり、名が示す通りの闇がりの間である。この部屋も副次的な空間で、当然のこと絵はなかったと思われる。

以上、見て来たように、大書院の9室の部

屋には、部屋名が示す絵が描かれていたと見て、ほぼ間違いないであろう。

さらに、各部屋の襖、壁貼付以外の部分、すなわち廊下側に当る腰高障子の腰の部分にも、虎の間のところで述べたように、各部屋の主題と同じ連続する絵が続いていたとおもわれる。また、襖や壁貼付の上部、長押の上から天井までの壁にも、壁貼付として各部屋主題と同じ図柄が続いていたものと思われる。そのことは、名古屋城本丸御殿や二条城二の丸御殿、さらには、江戸城本丸御殿と西の丸御殿の小下絵（こじたえ）から推測されるところである。

この様に、創建当初は大書院を中心に、篠山城二の丸御殿の内部は、ほぼすべて障壁画



表II 二の丸御殿間取古図にみる部屋名

で埋めつくされた豪華絢爛たる空間が展開していたものと思い描いている。

### 大書院障壁画の筆者について

大書院の障壁画の筆者については、何ら伝えられるところがない。

名古屋城本丸御殿の第一期造営は、慶長17年（1612）から元和元年（1615）で、この時に表書院や対面所が建てられた。障壁画を担当したのは、弱冠18歳の狩野宗家当主の狩野貞信（1597—1623）を中心に、叔父孝信、貞信の亡父光信高弟の狩野興以ら一門の画家達を動員しての制作であった。第二期工事は、寛永11年（1634）の將軍徳川家光の上洛に先立って造営され、上洛殿等が建てられた。この時は狩野貞信はすでになく、その従兄弟である狩野探幽を中心とする画家によって障壁画が描かれた。その間に狩野派の世代交替が見られる。

また、二条城二の丸御殿は、寛永3年（1626）頃に造営され、狩野探幽を中心に、その弟尚信や狩野興以、狩野道味、狩野甚之丞らの名が伝えられる。

篠山城の造営は、慶長14年（1609）3月に始まり、同年12月に初代城主松平康重が入場した。この事から城主一族等の居館である二の丸御殿は、すでに完成していたと見ていいであろう。とすれば、内部の障壁画も当然描き終えていたと見るのが一般である。しかし、篠山城の造営工事は、極めて異例な突貫工事であったようで、あるいは、内部装飾の障壁画制作などは、遅れて進められた可能性もある。

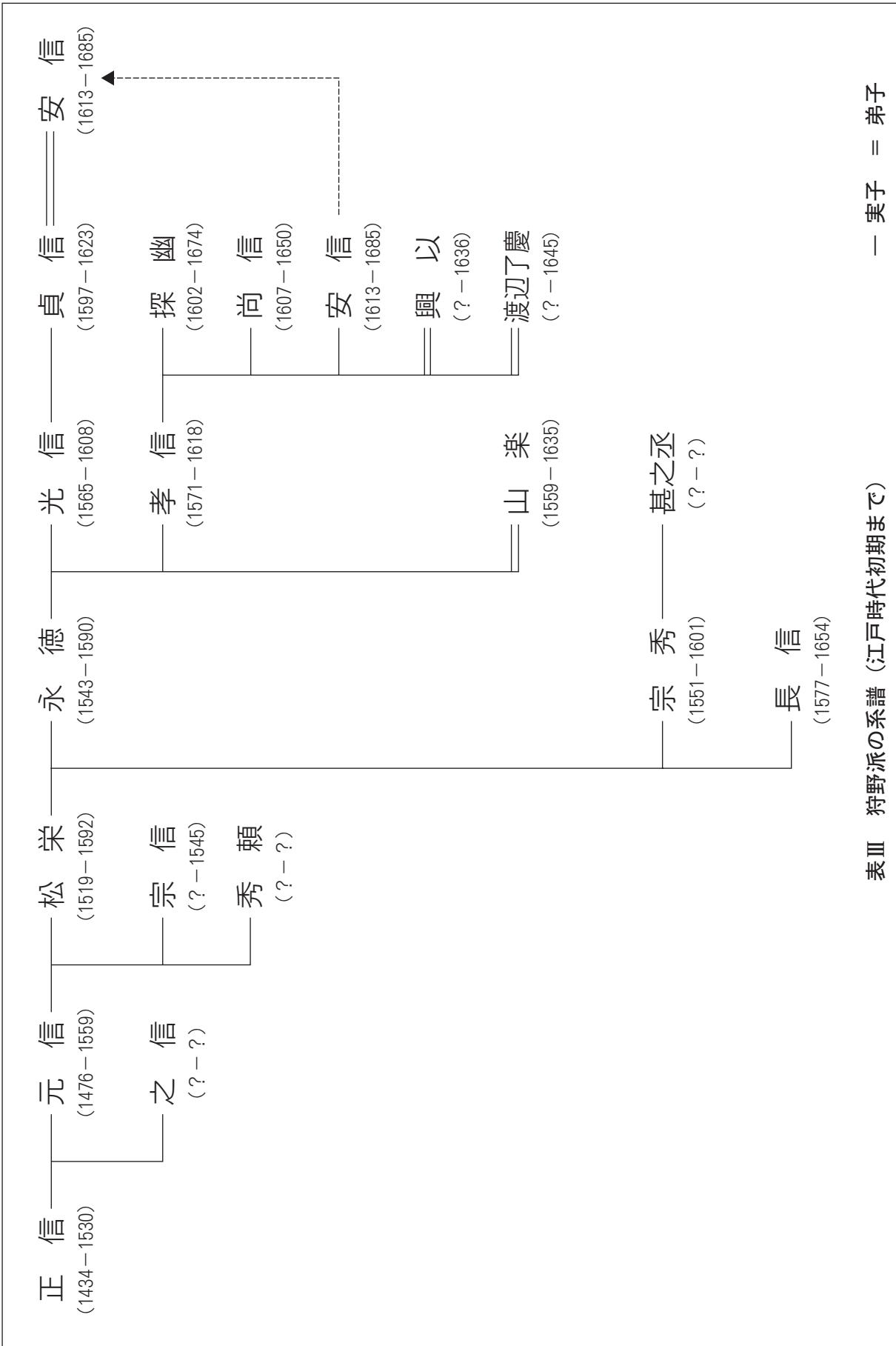
篠山城は將軍直轄の城郭ではないが、山陰から畿内へ通じる重要拠点の城として、徳川

家康は自分の子である松平康重を置いた。そのため江戸城、大坂城（徳川幕府の築いた大坂城）や名古屋城と同様、天下普請であった（各地の大名を動員して造営に当らせて築城された城）。このことから考えて、篠山城の障壁画を担当した絵師集団は、やはり狩野派であったと思われる。

表Ⅱを参照していただければ明らかなどおり、慶長14年（1609）は、狩野宗家の光信は前年に没しており、その嗣子貞信は、わずかに13歳（数え年）にしかすぎず、この様な大きな仕事を中心的に担うには、いさか若すぎよう。光信の弟孝信はまだ存命で、狩野宗秀（永徳の弟）の子甚之丞、永徳の末弟長信、光信高弟狩野興以や渡辺了慶らは活躍中であった。孝信の子の探幽、尚信はまだ年少すぎよう。永徳高弟の狩野山楽は大坂城の豊臣家の仕事に従事していた関係から、徳川家康の篠山城普請には参加しなかったであろう。（表Ⅲ参照）

こうした状況から判断すると、狩野孝信を頂点に狩野甚之丞、狩野長信、狩野興以、渡辺了慶らの何人かを中心に、狩野派の画家達が動員されたと見るのが妥当な見方ではないだろうか。もし、数ヶ月の突貫工事であったとするならば、一門の画家を大量動員しての仕事であったに違いないと考えられる。

ともあれ、天下普請の篠山城である。その内部を飾った障壁画は、狩野派の画家によつて描かれたと推測している。



表III 狩野派の系譜（江戸時代初期まで）

— 実子 = 弟子

# 4 篠山藩主 松平氏・青山氏について

篠山市文化財保護審議会 委員 今 井 進



## ◇はじめに◇

篠山藩主は、江戸時代261年間を通じて、松平氏3家8代、青山氏6代にわたって襲封した。

松平氏3家のうち松井松平氏以外の2家は、徳川家康以前に松平氏から分かれて、三河の国に所領をもち、その土地に土着し、その土地の地名を冠して、○○松平氏とよばれた。

すなわち藤井松平氏と形原松平氏がそれである。松井松平氏は康重が十数年在位したのち岸和田へ転封、後に藤井松平氏2代、形原松平氏5代を経て、徳川譜代の中でも古参の青山氏が5万石で入封し、後6万石に加増になり明治維新を迎える。

松平(松井)	慶長13年(1608) 常陸国笠間(茨城県)より丹波国八上城へ入封	慶長14年(1609) 丹波国八上城より篠山城へ入城	初代 松平(松井) 康重	和泉国岸和田(大阪府)へ転封					
松平(藤井)	元和5年(1619) 上野国高崎(群馬県)より入封	2代 松平(藤井) 信吉	3代 忠国	播磨国明石(兵庫県)へ転封					
松平(形原)	慶安2年(1649) 摂津国高槻(大阪府)より入封	4代 松平(形原) 康信	5代 典信	6代 信利					
青山	寛延元年(1748) 丹波国龜山(京都府亀岡市)より入封	9代 青山忠朝	10代 忠高	11代 忠講	12代 忠裕	13代 忠良	14代 忠敏	廃藩	明治2年(1869)

## ■松井松平康重

1600年（慶長5年）関ヶ原の合戦に勝利した、徳川家康は豊臣氏の勢力の抑え込みと西国諸大名の備えを目的に丹波篠山の地に新城の築城を命じた。前年に常陸の笠間より松平康重を丹波八上に移し、1609年（慶長14年）

3月に築城工事が始まった。延べ8万人、15か国20の大名衆が賦役を課せられた。松平康重は徳川家康の実子といわれ、母親が松井康親に嫁ぎ生れたが、母親が嫁ぐ前にすでに家康の子を宿しており、その子が後の康重といわれている。



徳川家康像  
(大阪城天守閣蔵)

京都長源院に康重の肖像画が残されているが、よく家康の面影をつたえている。

1609年（慶長14年）12月新城は完成し、松平康重が初代と城主として入城した。康重の篠山藩主としての在位は12年間であるが大坂冬の陣、夏の陣に篠山城から参陣した。

城下町の整備に多くの事績を残した。官名は従四位下周防守。1619年（元和5年）泉州岸和田6万石に転封する。松井松平家は後、石見浜田、



松平康重像（京都長源院蔵）

最後は武藏川越で明治維新を迎える。

### ■藤井松平家

松平康重が泉州岸和田へ6万石で転封の後、上州高崎から5万石で十四松平のうち藤井松平信吉が入封した。翌1620年（元和6年）死去、在藩期間は僅か1年で政事に見るべき事績はない。

信吉の後を長男忠国が襲封した。忠国は戦国気風の残る大名であったが、藩政には在地豪族の懐柔政策に翻弄されたといわれている。一方文芸には秀でた能力を發揮し、また沢庵

和尚とも交わり文化的な素養を備えた大名であった。官名は従四位下山城守。

1649年（慶安3年）、2万石の加増を受けて、播州明石7万石の大名として転封した。忠国が明石へ転封の、際に篠山春日神社に奉納したのが、有名な「黒神馬」の絵馬である。

### ■形原松平家

松平忠国が明石へ転封後、摂津高槻から5万石で、同じく十四松平家の一つ形原松平康信が入封した。康信後は典信、信利、信庸、信岑と5代続き、1748年（寛延元年）信岑の時に丹波亀山5万石に転封となった。



松平康信像  
(龜岡市光忠寺蔵)

康信の事績は治水事業に実績を残し、現在篠山市に現存する主要なため池は、この時代に築造された。また、多紀郡を上組、下組の2組に分けて地方支配確立して藩体制を確かなものにし、大庄屋制度の導入に踏み切り、郷士勢力の一掃に成功した。

次の典信、信利は共に早くして逝去し、康信が後見した。信利の弟信庸が襲封し、藩政は落ち着ついた。英邁な藩主信庸は藩内においては、儒学者松崎蘭谷父子を登用し、地誌編纂や歎農政策を積極的に行うなど文治政治が花開いた。一方京都所司代、老中など幕閣の要職の歴任した、官名従四位下侍従兼紀伊守、しかし、下馬將軍と呼ばれた酒井忠清の娘を妻としたため、忠清失脚後幕閣において

厳しい立場に立たされたと云われている。

信庸の後を継いだのは長男信岑、在位は1717年（享保2年）から1748年（寛延元年）までの31年間、この間天候不順による凶作や年貢高騰をめぐる百姓一揆などが勃発、また、篠山城の修復工事など厳しい財政政策を強いられた。

## ■青山家

1748年（寛延元年）篠山藩主形原松平氏に入れ替わる形で、丹波亀山（現亀岡市）から5万石で青山忠朝が入封した。譜代大名の所替えが詳細に記録された「松平家・青山家」の所替え帳面上下2冊は大変貴重な資料である。

青山忠朝は奏者番、寺社奉行を歴任、5万石格の譜代大名が就く大坂城代となる。大坂の町整備に尽力する1760年（宝暦10年）大坂城において死去する。篠山への帰藩はなかった。

忠朝に継嗣が無かったため、郡上八幡藩主青山幸秀の七男忠高が5万石を襲封した。

忠高は学問の奨励につとめるとともに関世美らの儒学者をもって、篠山藩校「振徳堂」を開基し藩士はもとより多くの領民の入学を許可したといわれている。しかし、一方ではうち続く凶作などにより厳しい藩政をよぎなくされた。

継嗣忠講は在位僅か5年で藩政を見るべものがほとどんない。1785年（天明5年）忠高の二男忠裕が襲封。奏者番、寺社奉行、大坂城代、京都所司代を経て老中に就任。官名は従四位下侍従兼下野守。幕閣にあって32年間老中職を勤める。

特に11代將軍徳川家斉の信任厚く、朝廷とりわけ光格天皇の信任を得て幕府と朝廷の斡

旋に勤める。また、相馬大作事件を裁いたり、死刑廃止の取り組みを自ら行った。また、藩政にあっては、殆ど江戸在府でありながら学問の振興につとめさらに藩校の教室を増築し、京都から儒学者の福井敬斎を招き学頭に任じた。学問を志すものは武士、百姓、町人、男女の区別なく受け入れた。これは藩校の「学規」に記されている。

さらに藩内の80歳以上の老人を報告させ敬老金を与えるなど、難渋している者の支援するなど福祉政策に力を入れた。この忠裕の時に市原村の清兵衛父子の酒造出稼ぎの直訴が起きたが、これを聞き入れ酒造出稼ぎの禁令を緩和した。そして、清兵衛父子の入牢について加護の手をさしのべたと伝えている。

1835年（天保6年）家督を嫡男忠良に譲り隠居、翌1836年（天保7年）死去。なお、1827年（文政10年）長年の功により遠江国榛原郡、城東郡の内において1万石加増される。のち篠山藩は明治維新まで6万石となる。

忠裕の継嗣は嫡男忠良、幕府の要職を歴任後1844年（弘化元年）幕府老中に就任する。

しかし、伝えるところ黒船に対する国防問題をめぐって老中阿部正弘との確執が生じ、1848年（嘉永元年）老中職を辞職する。藩政



青山忠裕像（蟠竜庵蔵）

においては兵制を洋式に変えよう試みたり、開明的な要素も持ち合わせた藩主であった。

そして、篠山春日神社に当時箱根山より西で最も整った舞台といわれた能楽殿を奉納寄進した。また、子女も多く3人の男子はそれぞれ犬山藩主成瀬家、下妻藩主井上家、黒羽藩主大関家を継いだ。

1862年（文久2年）家督を長男忠敏に譲り隠居する。1864年（元治元年）死去。官名は従四位下侍従兼下野守。

最後の藩主となった忠敏は幕末の争乱期あって幕府よりの態度をとり続けた。鳥羽伏見の戦いは15代将軍徳川慶喜に付き従い、幕府軍の敗退とともに慶喜とともに大坂城を経て海路江戸に戻ったという。藩内においては交戦か恭順と態度を決めかねていたが、最終家老吉原氏の裁断によって藩論を恭順に統一、山陰鎮撫使西園寺公望を受け入れ篠山城を開け渡した。後忠敏は篠山藩知事となりここに篠山藩政は幕を閉じた。

最後、今までの藩政に対する抗議の全藩一揆が1869年（明治2年）に勃発し、首謀者が死罪となるなど混乱がつづいた。

青山家の継嗣は忠敏から弟の忠誠に譲られた。忠誠は後軍人として明治政府に貢献した。

## ■まとめ

篠山藩は松平氏3家8代、青山氏6代が藩主を勤めたが、ともに幕府藩屏たる親藩、譜代の大名であり、領内で行われた政事がすなわち徳川幕府の政策であり、政治であつと考えられる。

しかし、近年江戸時代の政治、経済、社会秩序など見直されつつあることは間違いないところである。

例えば身分制度について、江戸時代から存在していたものではなく、明治時代になって東大の高橋教授によって中国法制度に基づいて唱えられたものであるといわれている。

江戸時代は武士、都市にあっては町人、地方にあっては百姓と呼ばれていた。近年多くの文書を中心に研究が進み、江戸時代の社会構造が明らかにされつつある。

このことを踏まえ地方における封建社会の社会形態の見直しに迫られていることも事実である。

# 5 篠山城下町の空間構造

大阪市立大学 教授 仁木 宏



## ◇はじめに◇

現在、兵庫県篠山市の中心市街を構成する篠山城・城下町は、慶長14年（1609）に建設がはじめられ、整備されていった。

本講座では、篠山に先行する八上城・城下町の時代にさかのぼって、周辺の地理的環境の変化をあとづけ、篠山城・城下町の歴史的意義を明らかにしたい。

## 八上城の歴史

篠山城・城下町の東の郊外に位置する八上地区には、室町・戦国時代に八上城とその城下町が経営されていた。

室町時代に守護大名として丹波国を支配していたのは、幕府の管領であった細川氏（惣領家）であった。細川氏が国内に何ヶ所か設定した拠点のうちの一つで、多紀郡の中心とされたのが八上であった。八上は、京都と山陰方面を結ぶ街道が通る、交通上の要衝である。

細川氏の家臣として八上に入部してきたのが波多野氏である。波多野氏は、16世紀前半、八上の南方に広がる奥谷に独自の支配拠点を設定した。そして奥谷城を築き、奥谷城下町を整備したと考えられている。やがて、波多野氏は丹波国を代表する政治勢力に成長し、16世紀中頃には、京都の中央政界にも影響力を与えるまでになった。

永禄11（1568）年、織田信長が上洛してく

ると、波多野秀治は信長に従属した。しかし、信長の家臣である明智光秀が本格的に丹波国に介入してきた天正4（1576）年、秀治は光秀に対して挙兵し、八上城に籠城した。長く厳しい攻防ののち、天正7年、八上城は落城し、秀治らは近江国安土にて処刑された。

天正8年、明智光秀は、信長から丹波国を領地としてもらった。光秀自身は近江国坂本城を本拠としたが、光秀の一族が八上城に入城したらしい。しかし、天正10年、本能寺の変を起こした光秀が死去すると、代わって羽柴秀勝（秀吉の養子）が丹波一国を領有し、亀山城（亀岡市）に在城した。

羽柴・豊臣時代の丹波国の領知については不明な点が多い。慶長5（1600）年以前には、前田玄以（当時の亀山城主）が子息茂勝を八上城に配置していたらしい。関ヶ原合戦の8年後の慶長13年、前田茂勝が改易され、松平康重（徳川家康の子息）が八上に入封することになる。

後述するように、翌慶長14年、康重が篠山城下町の構築を始めると、八上から篠山へ町人が移転していったらしい。そして元和2(1616)年までに、八上は宿場町へとその姿を変えてゆくのである。

### 明智・前田氏段階の八上城下町

天正8(1580)年から慶長13(1608)年の中、八上城には明智氏、羽柴氏、前田氏らの大名やその家臣が入り、城下町はこれら織田・豊臣系諸勢力によって振興されたものと想定される。しかし、その実態は不明である。

地形や古い地名などを調べると、春日神社付近にあった大名居館を中心に、郭内(家臣団居住区)と城下町が区分されていたらしいことがわかる。また、篠山城下町の中心的な町である二階町、小川町の名前が、かつて八上地区の田地の名前(小字名)として残っていたことからそのあたりに町場があり、それが篠山城下町に移転したのではないかとも言われている。

この他、篠山城下町に立地する誓願寺、尊宝寺、真福寺、観音寺、来迎寺、妙福寺などは八上から移転したという寺伝をもつ。実際、八上には誓願寺谷という地名が残り、これは誓願寺の跡地であると思われる。

発掘調査がほとんどなされていないこともあり、八上城下町については不明な点も多い。しかし、八上地区で城下町がある程度の繁栄を見せており、それが篠山に城下町ができる大きな前提条件であったことはまちがいないだろう。

では、戦国時代の八上地区から、近世になると篠山に城と城下町が移転せざるをえなかつた理由はどこに求められるだろうか。

一つは、八上では城山が高く、大きすぎることであろう。近世は一般に平山城の時代とされる。これは、城郭をコンパクトかつ集約化されたものにすることで要害性を確保する一方で、城下町を手近に支配するための方策であった。前田氏時代の八上では、大名居館が八上城の北麓である春日神社付近に置かれることで、城下町を手近に支配することは実現したが、この場所では明らかに要害性が足りなかった。やはり独立した小丘陵を城郭とする必要があったのである。

もう一つの理由は、八上では、城下町として確保できる地形がせまく、また篠山盆地の東側に片寄りすぎていたことであろう。近世の城下町では、家臣団屋敷や町屋が安定した平地に広がりをもって展開するのが理想とされた。また平野(盆地)の中心部に城下町は置かれ、四方に交通路が通じていることが望まれたのである。

こうしてより発展性の高い地勢をもつ地として篠山が選びとられてゆくことになる。

### 篠山城の歴史

やがて篠山城が築かれるあたりは、中世には多紀郡日置庄黒岡とよばれた。そこに立地する笹山という丘陵には、戦国時代、篠山氏の居城があったと伝える。

慶長13(1608)年、松平康重が八上に入封した。いまだ大坂に豊臣家が残るこの段階において、康重は、もっとも西端に位置する徳川譜代大名であった。当時、徳川幕府は、外様大名の改易による豊臣体制の改変、それに反比例する徳川体制の拡大を進めていた。康重の八上入部もその一環であり、かなりの緊張感をもって受けとめられたであろう。

この頃、畿内近国では、山城国伏見、播磨国姫路、近江国膳所・彦根、伊賀国上野、伊勢国津などで城郭の修築がなされていた。

慶長14年（1609）、康重は、父家康の命を受け、新しい城の候補地を選ぶこととなった。伝承では、王地山、 笹山、飛ノ山の3つの丘陵が候補となり、その中から 笹山が選ばれたという。当時、 笹山には春日社があったが、北の小山に移転させられたらしい。

篠山城の普請物奉行は池田輝政であった。輝政は家康の女婿で、この時、姫路城主であった。繩張奉行は、伊勢国津城主の藤堂高虎であったが、実際の繩張りはその家臣渡辺勘兵衛が行ったという。

城は、「天下普請」（諸国の大名が経費・人手などを負担する）で築かれ、丹波国福知山の有馬氏、美作国津山の森氏、土佐国高知の山内氏、周防国萩の毛利氏など、15ヶ国20大名によって築かれた。八上城その他、近隣の古城の資材が活用されたらしい。

徳川方は、豊臣氏の拠点である大坂城包囲作戦の一環としてこの篠山城を築いたと考えられている。徳川軍が大坂城を攻める時、西国外様大名が大坂に援軍に向かおうとするのを防ぎ、また大坂に対する攻撃の拠点として利用するためであったのだろう。

大坂落城、豊臣氏滅亡後の元和5（1619）年、松平康重は和泉国岸和田へ転封した。この後、篠山城には、松平信吉、松平康信ら歴代が入り、ついで寛永2（1749）年、青山氏が入部を遂げる。以後、城主青山氏の時代が長くつづくことになるのである。

## 「正保城絵図」と「諸国当城之図」

篠山城や城下町を描いた絵図としては、現

在、数葉が知られているが、なかでも「正保城絵図」は初期の優品とされる。

城郭は、殿守丸、本丸（「平山城」）を中心とし、二の丸を方形の堀で囲む形状で描かれる。「殿守土台 但殿守ハナシ」という記載が目をひく。城郭の周囲に城下町が展開する。そして城下町の外回りに藪土居と細い川（水路）が見えるが、これらは城下町の全域を囲繞する惣構であったのだろう。

この「正保城絵図」では、城郭を実際よりも大きめに描き、また立体見取り図風になっている点が特徴といえる。その一方、城下町は簡略である。全体として規模寸尺が詳細に入っている。四方の山々との距離や山々の高さまで記入してある点が興味深い。

篠山城では、享保3（1718）年頃以降、元の「本丸」を「二の丸」、「二の丸」を「三の丸」と改称したようで、本図はそれ以前のものであることが知られる。

「諸国当城之図」は、17世紀当時、実在した諸国の城を描いた資料としてよく知られている。篠山城については、「正保城絵図」を簡略化しており、軍学研修用のハンドブックのようなものであったと推定される。

図中、城下町の北側に「慈明寺」という表記が認められる。この寺は本当は栄松寺とよばれる寺院であり、「慈明寺」という名称は、5世住職慈明院義明（1677年～1702年在住）にちなんで書き込まれたものであろう。すなわち、同図には、17世紀末期の情報が描かれていると推定されるのである。

## 篠山城下町の特徴

篠山城の築城にあたり、城下町を水害から守り、また町場の面積を確保するため、篠山

川に築堤し、川の流れを南にずらせたと考えられている。その上で、その部分に、城下の東端の町である河原町を設定した。

当初、城下町の中心部付近を北から南へ貫通していた黒岡川を改修して屈折させ、篠山川と二重の防御線にしたとも伝えられている。これは、明和年間のことであったろうか。この河川の付け替えによって、城下町南部には低湿地が形成され、自然の要害となった。さらに、城下町東側の王地山には、八上から本経寺、稻荷神社をさせ、西側の飛ノ山麓には歴代城主の菩提所が設定された。これらは、城下町の外構えを構成したとされる。

城下町は、城郭の東・北・西をとりかこむように走る本街道沿いに展開した。この街道筋がほぼ正東西、正南北の方位をもつてに対し、中心にある篠山城は東西・南北の軸線から左に少し傾いている。普通、城郭と城下町の方位は一致するものであり、どうして篠山城と城下町がそうなっていないのかは不明である。なお、街道筋の方位は周辺に先行して展開していた条里ラインに規定されたものと推定される。

城下の武家屋敷に注目すると、本街道の外側に立地する武家屋敷居住者が、街道内の武士より高禄であったらしい。これは街道外の武家屋敷の重要性を示すといえよう。すなわち、こうした武家屋敷によって城下町の外側の防衛を堅固にするという意図があったと推定される。なお、城下の武家屋敷は平均して、商人町の町屋の3倍の面積をもつという。

城下の町のうち、二階町、魚山町、呉服町、小川町などは八上から移転してきたという伝承をもつ。この他、多紀郡内の味間、宮田、追入などの市町から町人が移住してきたらし

い。

実際、城下町当初の町づくりに、八上の商人が利用されたらしい。二階町に屋敷を有した渋谷善兵衛は、波多野氏時代からの「郡代」であったと伝える。同じく二階町の兵庫屋惣兵衛も「郡代」であったという。これらの伝承がそのまま事実かどうかは確かめようもないが、多くの城下町で町屋部分の建設にあたって、いまだ兵商が完全には分離していない時代でもあり、地域の有力武士の流れを汲む有力商人が活躍したことは事実である。篠山でも同じようなことであったのだろう。

寛永年間の終わり頃には、城下には、上河原町、下河原町、小川町、上立町、下立町、呉服町、二階町、魚屋町、上西町、下西町などがあったことが確認される。この後、二階町は上二階町・下二階町に分かれたらしい。

城下で一番の町が「二階町」という名称をもつのも興味深い。これは、その町が二階建ての町屋からなる町並みであったことを示すのだろう。17世紀半ば以降、多くの城下町では軒高制限が設けられて二階建ての町屋が姿を消してゆく。そうした中で、特別な町としての「二階町」の存在（記憶）がその町名を長く継続させたのであろうか。

現在でも名残が残っているが、篠山城下町の入口は屈曲させられている。これはもちろん軍事的なものであり、また「ここから城下に入る」ということを象徴的に示す地点表示でもあったんだろう。

この他、寺院の多くは城下町防衛のために城下外縁部に配置されたとされる。城下の北東に2寺院、北西に2寺院、河原町に3寺院が立地する。

篠山城下町の歴史的意義

16世紀末から17世紀前半にかけて、城下町は縦町型から横町型へ進化したといわれている。縦町型というのは、目抜き通りが大手門にいたる道筋となるプランで、16世紀末期にあたる天正・文禄期、豊臣氏の一族・家臣たちが主導して建設した城下町に多くみられる。

横町型は、大手門に至る道筋はメインからはずれ、城下を貫く街道筋が目抜き通りとなるものである。これは、他の都市との交通動脈を重視した結果であるといわれ、また町人地の間に格差が生じにくく構造であるとされる。17世紀初頭（慶長期）の徳川系城下町にしばしばみられる構造であるとされる。城下町が、領国支配の拠点として確立し、全国規模の市場経済ネットワークに対応するための構造変化によるという。

このような全国規模の城下町構造の流れからみれば、篠山城下町は最も早い時期に横町型の城下町として建設されたことがわかる。城郭が「天下普請」であったこともあわせ考えるならば、当時の最先端モデルの城・城下町として設計・建設されたのだろう。

その後、必ずしも経済発展の恩恵に浴しなかったため城下町の面積的発展がなかったこともあり、篠山城下町はよく当初の構造を残し、今に伝えているといえるだろう。

## 【参考文献】

- 嵐 瑞激『丹波篠山の城と城下町』  
『二〇世紀から二一世紀へのおくりもの  
国指定史跡篠山城跡大書院復元工事  
竣工記念誌』篠山市  
『八上城・法光寺城跡調査報告書』  
篠山市教育委員会  
宮本雅明他『図集日本都市史』  
東京大学出版会  
宮本雅明『城と城下町』  
朝日百科日本の国宝別冊  
〈国宝と歴史の旅〉5 朝日新聞社  
『篠山町遺跡詳細分布調査報告書』  
篠山町教育委員会  
『篠山の城下町』観光資源保護財団  
『藩史大事典』雄山閣  
『日本城郭大系』12 〈大阪・兵庫〉  
新人物往来社  
『戦国の城近世の城』新人物往来社  
『日本の名城 城絵図を読む』  
新人物往来社  
『城絵図を読む』よみがえる日本の城26  
新人物往来社  
原田伴彦他編『浅野文庫蔵諸国当城之図』  
新人物往来社  
工藤寛正編『国別藩と城下町の事典』  
東京堂出版  
森田恭二『おもしろ日本史』和泉書院  
八上城研究会編『戦国・織豊期城郭論』  
和泉書院

まちあるきの考古学

<http://www.koutaro.name/machi/sasayama.htm>

# 6 丹波の城をめぐる 篠山城跡と採石場

郷土史研究家 池 田 正 男



## ◇はじめに◇

城郭の築造年代を知る一つの目安として、石垣がある。戦国時代の城郭が、山を切り盛りして築いた「土の城」である。それに対して、織田・豊臣氏が活躍し築いた、いわゆる織豊系城郭は、高い石垣、高石垣で防御した「石の城」と言われている。その後、この織豊系城郭が、近世城郭へと発展していくことになる。

ここでは、近世城郭である篠山城跡の石垣と石垣の石材、石垣石材を「篠山城跡と採石場」と題してまとめてみた。

## 1. 篠山城の築城

徳川幕府は、1600年（慶長5年）関ヶ原の戦いに勝利したのち、1614・15年（慶長19・

元和元年）大坂冬の陣・夏の陣にいたる約15年の間に、その基礎を固め、全国を統治する必要上自らが、築城し、また親藩・譜代等の



写真1 篠山城跡二の丸南西隅石垣

大名に築城を行わせしめた。例えば、篠山城築城の1609年（慶長14年）以前には、近江膳所城、同彦根城、以後には尾張名古屋城、越後高田城などが築城された。

篠山城は、1609年、山陰道の交通の要衝である篠山盆地の中央部に、徳川家康の命令による徳川幕府のための戦略的な城として、15箇国20藩の西国大名に助役を命じる天下普請（註1）によって築かれた。

普請総奉行に池田輝政（姫路城主）、繩張奉行に藤堂高虎（津城主）、目付に松平重勝（旗本）、普請奉行に玉虫勝茂・石川八佐衛門・内藤金佐衛門（いずれも旗本）が任命された。（註2）

篠山城築城の状況を伝える『篠山城記』によると、6月1日「鍬初メ」、6月20日「根切り」、7月9日「根石初メ」、9月18日「大著到」（石垣普請が大略完成）、10月5日「奉行衆・諸国大名衆帰国」、12月吉辰「周防守殿（松平康重）、篠山新城へ移徒」と記され、石垣、土塁や堀などの「普請」（土木工事）を、6月から9月にかけて100日余で終わらせるほどの突貫工事であった。

これらの工役に従事した者は、毎日7～8万人（註3）と言われ、木石を運ぶのに「百人を一組として八百組に分かち、各々しるしの旗1本宛を立て」作業したと古記録に記されている。

篠山城の石垣（石積み）は、『篠山城記』以下民間の記録に、「篠山御城御取立に付、…慶長14年7月9日根石初メ、江州穴田（=穴太）ト云所ヨリ築（=筑）後、三河、駿河ト云石垣師來テ石垣ヲ築ク」と記している。言い換えると、近江の穴(あの)太(う)から当時最も優れた石積み技能集団が来て、筑後、三

河、駿河という名の石垣師が差配し、7月9日に石垣の基礎石である根石を据え、積み始めたことが伺える。（写真1）

次に、篠山城跡の高石垣に多くの符号が記され、この城の特徴とされている。

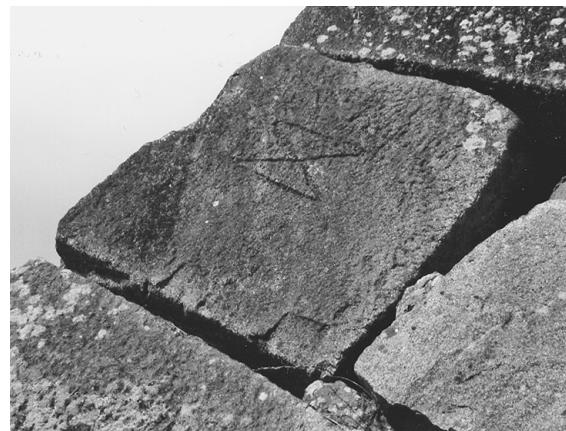


写真2 刻印と矢穴のある石



写真3 複数の刻印と矢穴のある石



写真4 刻印と矢穴のある石



写真5 刻印石

この符号は、ノミで陰刻した刻印・刻名、墨（又は朱）で書いた墨（朱）書印・文字等の総称である。篠山城跡では、現在までに約250種（うち墨書3種）が確認されている。（写真2～5）

例えば、埋門（うずみもん）を出た、西側の巨石に「三左エ門」あるいは「三左の内」と陰刻されている。城門の要所に位置し、符号ではなく本名を表わしていることなどから、普請総奉行である姫路城主、池田三左衛門輝政の刻名と推測され、また前者の「エ門」を「の内」と解して「三左エ門の配下」の者、すなわち家臣が担当したという意味であろうとする説もある。（写真5、註4）

この符号をもつ石垣は、江戸城跡ほか、近畿周辺の城では名古屋城跡、大坂城跡、姫路城跡、和歌山城跡等々に見ることができる。しかし、この符号の意味については、見解がまとまっていない。そこで、神奈川県伊東市教育委員会金子浩之氏（註5）は、正確にはわからない面も多いとしながらも、一つの考え方を出されているので参考としたい。

江戸城の石垣に確認できる刻印と、伊豆半島の各所にある採石場で確認される刻印が大多数一致する。このことを、江戸城石垣の普



第1図 篠山城と採石場の位置

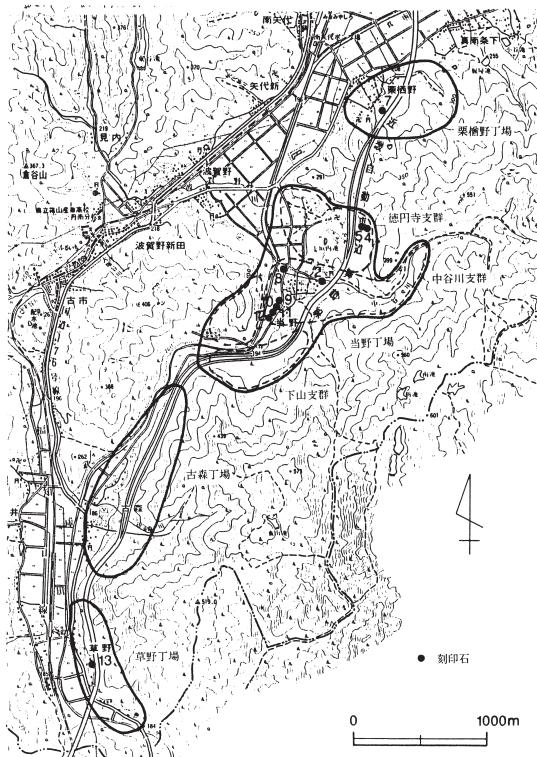
請に動員された大名たちが伊豆の山中に石材を求めたことの決定的な証拠のひとつとした。

さらに、採石場内に石に刻まれた銘文史料が多数あることから、これらの銘文が示すとおり、各大名が自分の丁場の境界を示す目的で現地の大石に刻んだものが多く、江戸城の石垣が割普請であるのと同様に石材採取地でも明確な境界意識の下に石材を生産したものと推理している。

高石垣に記された符号と、採石場に記された符号、そしてその符号をもつ石垣石が積まれた結果から、天下普請が具体的どのように行われたのか、今後の課題である。

## 2. 採石場

築城に使用した石垣石材は、膨大な量であったことは容易に想像される。石材は、当然城周辺の自然石や古墳、中世の城郭等を取り壊



第2図 採石場の位置と刻印石

して利用したと思われるが、高石垣の石材となれば、形状・量・質等の条件を満たす採石場からの供給が必須となる。

篠山城の採石場は、城を中心に約10km以内に、古森、当野、栗栖野、王地山、鷺ノ谷、熊ノ谷、宮田谷、追入谷の8箇所がある。  
(第1図)

採石場の例として、当野（とうの）採石場を取り上げると、この採石場は、篠山城から西南7km余、篠山市と三田市の市境に近く、武庫川が屈曲して南流する当野の谷間に位置する。武庫川に流れ込む、北から当野川、中谷川、猪ノ川の谷間に見ることができ、各自のまとまりを北から、徳円寺支群、中谷川支群、下山支群と分け、呼称している。(第2図、註6)

現在、各支群内の谷間に路頭する転石を母岩として、楔を打ち込んで割る「矢穴技法」



写真6 中谷川支群の矢穴石



写真7 下山支群の矢穴石

によって割られた石を見る能够である。石積みと同様に穴太から石垣石材を切り出し、加工する技术の優れた「石工」が従事したと思われるが、具体的に母岩からどのようにして切り出し、形を整え、製品である石垣石材としたのか、不明な点が多い。(写真6・7)

中井氏の「近世城郭の石切場」(註7)に引用された江戸時代前期の丁場である金沢市キゴ山西オクノタニ丁場では、加藤克郎氏によって石材分割工程を紹介されている。

石材における分割工程は、3段階ある。「①大割り（原石→母岩）、②中割り（母岩→粗割材）、③小割り（粗割材→粗石材）、いずれも石割作業面を上に向けて石を据え、矢穴を彫り、矢を打ち込んで分割した後、石材を横



写真8 河原町鳳凰会館の敷石(刻印石)

倒して次の石割を繰り返し、最後に正面を割取りし成形が完了すると、ノミで表面を整え、正面に刻印を刻んで完成する」というものである。

石垣石材に符号を陰刻した刻印石は、当野採石場をはじめ、栗栖野採石場からも発見されている。刻印の多くが、石垣が組み上げられた後に陰刻されたのではなく、採石場内で陰刻された事実が認められる。

石垣石の運搬について、当野から真南条を通って小枕へ、そして篠山城へ運ばれた。郷土史家、奥田樂々斎は「別に運搬道（石曳道）を作つて、何れもコロと称する枕木を使って運んだらしく、その道路になった部分だけが、後々まで土が固まって田を作るのにも困った」という話を聞いている」と『多紀郷土史考』に記している。

また、鶯尾部落の庄屋、円増家文書の1832年（天保三年）の年号覚書に「篠山普請の年に大倉道も大石を車にて下成、畠中をふみやぶりして新しい道が出来た」と書き、共に石垣石専用の道を造つて運搬したことを明らか

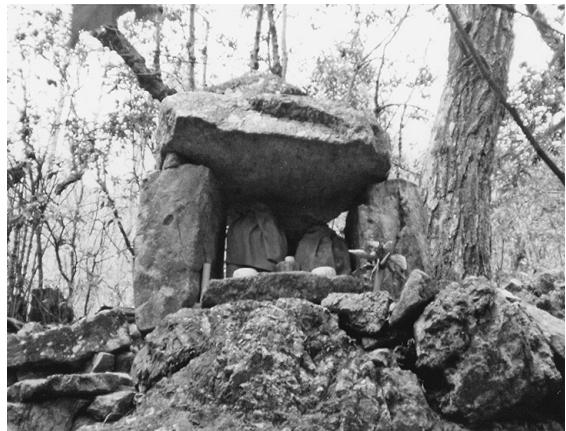


写真9 当野犠牲者の墓

にしている。

### 3. おわりに

1873年(明治6年)廃城後、篠山城の本丸・二の丸の高石垣、大書院を除く建造物等は取り壊され、今日に至っている。その際、石垣石は市内各所に運び出され、刻印石が、黒岡川の河川改修に使われ、下川原町観音寺の庭石、同町鳳凰会館の敷石(写真8)、下立町・下二階町等の住宅土台石などに転用されているのを見ることができる。

当野の採石場は、現在、徳円寺・中谷川・下山支群を串刺ししたように1980年代、近畿自動車道舞鶴線が走り、1996年(平成8年)夏の集中豪雨により、河川が氾濫し、土石流となって流出したため、災害関連緊急砂防工事として砂防堰堤が築かれ、旧地形は著しく変容している。

このような現状を踏まえ、篠山城石垣石のさらなる研究の必要を痛感するしだいである。最後に、当野の金山(かなやま)中腹に、石材にかかわる事故で死んだ犠牲者の墓（地蔵菩薩）と言い伝える祠がある。地元の方々により、厚く祀られていることを記しておきたい。(写真9)

註) 1 織田信長の安土城、豊臣秀吉の大坂城・聚楽第・伏見城、徳川家康の伏見城・二条城・駿府城、徳川秀忠・家光の江戸城・大阪城、等々、いずれも天下人が諸大名を動員して天下人のために築いた城である。築城の仕方は天下普請であり、天下人自身が城主である。一大名が自らの領国支配の拠点として築く一般の城とは規模も性格も違う。

註) 2 「篠山城」『日本城郭体系12 大阪・兵庫』1981年3月刊行

註) 3 『大日本史料 第十二編之六』所収の「毛利文書145」毛利秀就黒印定書によれば、午(うま)歳(どし)（三年前の慶長十一年）の江戸城普請以来、天下普請の動員人夫数は石高100石に二人ずつと決められていた。

総石高354万石余では7万800余人となり、

『篠山城記』という古記録（『大日本史料 第十二編之六』所収）に「諸勢都合八万人」とある。総石高の概数を400万石とすると理解される。

註) 4 中山正二『古城有韻』1954年6月刊行  
朽木史郎『篠山城石垣符号の研究』  
1960年10月刊行

註) 5 金子浩之「伊豆石」  
『季刊考古学第99号』2007年5月刊行

註) 6 兵庫県教育委員会『篠山城採石場』  
1988年3月刊行

註) 7 中井 均「近世城郭の石切場」  
『季刊考古学第103号』2008年5月1日刊行

第1・2図 兵庫県教育委員会  
『篠山城採石場』1988年3月刊行より転載

## 7 講師プロフィール

大 路 靖

岡野多目的研修センター館長  
専門分野 郷土史  
経歴 平成9年3月 篠山小学校校長 退職  
現在、篠山市文化財保護審議会 委員

木 村 重 圭

甲南女子大学 教授  
専門分野 日本の近世絵画史  
経歴 昭和42年 関西学院大学院修了後、兵庫県立近代美術館学芸員、兵庫県立歴史博物館学芸課長を経て現職  
著書 村上華岳（中央公論）、竹久夢二（集英社）、丸山応挙（京都新聞社）他

今 井 進

篠山市文化財保護審議会 委員  
専門分野 美術工芸史、近世絵画史  
経歴 平成19年3月 篠市教育委員会教育部長 退職

仁 木 宏

大阪市立大学 教授  
専門分野 日本中世・近世史  
経歴 平成2年 京都大学大学院修了後 大阪市立大学講師を経て現職  
著書 空間・公・共同体（青木書店）、  
戦国時代 村と町のかたち（山川出版）他

池 田 正 男

郷土史研究家  
専門分野 考古学  
経歴 平成19年 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 退職  
著書 原始・古代の丹南（丹南町史 上巻）  
木戸勇助と雲部車塚古墳（兵庫県の歴史 第31号）

## 8 編 集 後 記

今年度も残すところあとわずかになりました。思えば激しく揺れ動く社会の変化に加え、政局においては政権交代、経済界においては世界金融危機に端を発した厳しい経済雇用情勢など、まさしく激動の一年でした。ここ丹波地域でもその影響を受けるとともに、あわせて少子高齢化・過疎化による地域活力の低下など地域特有の課題が山積しています。

こうした中、「丹波の森宣言」のもと平成8年にここ丹波の森公苑開苑と同時に開設された講座「丹波学」も今年で14年目を迎えました。地域の方々に愛され、親しまれてきた経緯を思いおこすとき、時代の流れを感じるとともに先人の取り組みに対して、大いに敬意を表します。

今年度は丹波篠山築城400年という大きな節目にあたり、篠山市においては「丹波篠山スタイル～丹波篠山の本気・本物を掘り起こす～」をテーマとして篠山城跡を中心に全市域で多彩なイベントが繰り広げられ、丹波篠山の歴史と文化を振り返るとともに、21世紀の持続可能なまちづくりが提唱されました。

ここ丹波の森公苑ではその趣旨に賛同して、地域学としての講座「丹波学」を今年度は「(続) 丹波の城～篠山築城400年～」をテーマに開設しました。「温故知新」。丹波学を学ぶ意義は、まさに故きを温ねて新しきを知る。ただ単に昔のことを知るだけではなく、その知識を今後の我々の生活に活かすことになります。講座には篠山市のみならず、講座には丹波市の方々も多数受講していただき、その熱意に頭が下がる思いです。また講師の先生方にもただ単なる専門的な知識の伝授ではなく、わかりやすい講義をいただきました。

受講いただいた方々からは「長い間の経験に基づき一般歴史書にない現実感があった」「篠山城にかかる歴史を新しい切り口で説明いただき新鮮であった」等のご感想をいただき、担当いたしました事務局としても大変嬉しい限りです。

今後とも、悠久の時を超えて語りつがれた丹波の文化を学び、新しい視点で我々の心と生き様をさぐる、そんな丹波学でありたいと願っています。

=====  
**平成21年度 講座「丹波学」**  
**(続)丹波の城 ~篠山城築城400年~**

平成22年3月31日 発行

□発行者 勘兵庫丹波の森協会  
兵庫県丹波市柏原町柏原5600  
□印 刷 丹波新聞社

=====